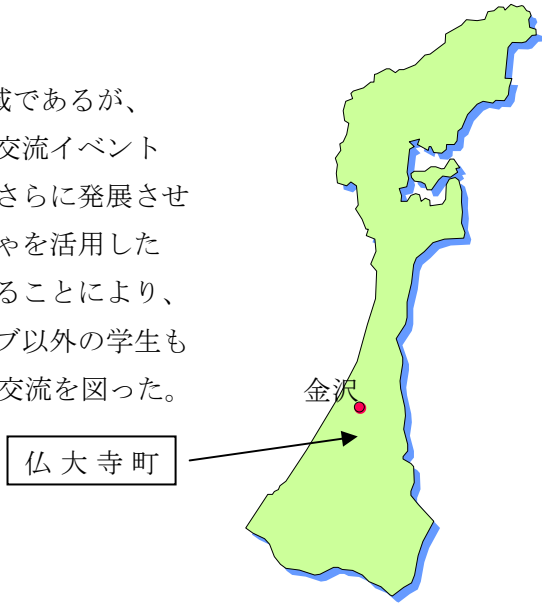
能美市の地場産物を活用したスイーツ開発と商品化の提案
－まちむら交流イベント「能美ほっこりまつり 2009」への参加－

学生団体名：Ｓｗｅｅｔｓ．Ｌａｂ．＠ｍｉｓｓｉｏｎ（北陸学院大学短期大学部）
参加学生：国沢綾香、小嶋春香、木内雅子、北村亜紀子、谷口翔子、橋本瑠璃子、野村京子

１．地域活動の概要

能美市仏大寺町は、現在 9 世帯 25 人という過疎地域であるが、里山地域としての活力創出を図るため、まちとむらの交流イベントとして「ほっこりまつり」を行っている。この活動をさらに発展させるために、この地域の地場産物である、柚子やかぼちゃを活用したスイーツを研究開発し、提供販売を通して商品化を図ることにより、この地域、イベントのアピールを行った。同時にクラブ以外の学生も参加し、学生の視点から里山のよさを発見し、地域との交流を図った。



２．地域活動の具体的な内容

１）「ほっこりまつり」への参加

①第１回打合せ　7 月 31 日（金）

仏大寺町公民館で、クラブ代表と能美の里山ファン倶楽部代表の小川氏と現地の世話役の方々を交えて、現地の状況や、前年の「ほっこりまつり」の概況についての説明を受けた。その後、私達が今回取り組みたいと考えている、地場産物を使ったスイーツの研究活動について説明した。一方、現地の方々からは、このイベントの運営にも一緒に関わることで、まちとむらの多くの人々との交流を深めてほしいとの意向が示された。このとき、この地域の産物としては、柚子があり（当初「丸いも」を考えていた）、また、霊水とよばれる、美味しい涌き水があることを教えられた。以上の話し合いを受け、スイーツの材料としては、柚子を中心に考えることと、イベント運営のボランティアとして、クラブ員以外の学生を募ることとした。

なお、当初 10 月 17・18 日の 2 日間であったが、10 月 24・25 日に延期となり、クラブの参加は 25 日（日）となった。

②第２回打合せ　9 月 10 日（木）

クラブ員 7 名と教員 4 名が参加し、話し合った。スイーツの提供場所として、販売の他に、地元の方が運営するカフェが用意された。また、軽食の提供も検討したが、他の出店もあるとのことで、今回は、スイーツのみとすることを確認した。

スイーツの提供以外では、カフェ運営の手伝い、かまどで炊いたごはんや、山菜を使った惣菜の販売、さらに、イベント運営の様々な手伝いに、クラブ員以外の学生が関わることとなった。

③第３回打合せ　10 月 5 日（月）

交流イベントへの出店者があつまり、場所や、電気・水道等などの利用方法、必要な備品の確認が行われた。また、当日の交通規制についての説明があり、動員する学生の移動について

検討の必要性ができた。このとき、雨天の場合の対策は個々に対応することとなり、学校にテントの準備を要請した。

④第４回打合せ　10 月 12 日（月）

学生２名とカフェ担当者とで、提供するスイーツについて試食と内容の意見交換を行った。

⑤ほっこりまつり当日　10 月 25 日（日）

当日は天気にも恵まれ、2000 人の来場者があった。学生は 25 名参加した。当クラブは、Mさん宅車庫前にテントを張り、スイーツの店頭販売を行った。一方、クラブ製作のスイーツがMさん運営の「ほっこりカフェ」で提供された。この他に、各ブースに学生がヘルパーとして参加した。なお、駐車場に制約があったため、学生は自家用車に分乗して現地へ行った。

２）スイーツの開発研究

当初、この地域の特産物は「丸いも」と考えていたが、「柚子」であることが分かり、「柚子」を中心に考えることとなった。また、屋外での販売であることと、冷蔵庫の使用が難しいことから、生菓子はカフェでの提供品のみにとどめ、焼き菓子とすることになった。

試作調理は、当初予定になかった百貨店への出店販売が、急遽８月中旬に行われたことから、それが終わった８月下旬より始めた。この際、この地域の特産品の柚子が中心となるが、これだけでは、スイーツの種類が限定されるため、この近辺の地域の産物も加えて検討した。試作したものは次の品目である。

① 柚子のフロランタン
② 白山きのこのパウンドケーキ
③ 原木なめこのパウンドケーキ
④ 加賀棒茶と柚子ジャムのパウンドケーキ
⑤ 里芋のブリュレ
⑥ 加賀棒茶のパンナコッタ
（地域の霊水を使う）
⑦ パンナコッタの柚子ジュレがけ
⑧ 秋星りんごと摘果キウイのタルト
⑨ 柚子味噌のシフォンケーキ
⑩ かぼちゃのシフォンケーキ
⑪ 蓮根のスティックチーズケーキ
⑫ 各種シフォンケーキのラスク

能美の食材でタルト

北陸学院大生 25日ほっこりまつり出店

創作菓子で誘客促進

能美市の食材を使った菓子作りに取り組む学生＝能美市の北陸学院大

北陸学院大短大部食物栄養学科の学生10人が作った菓子で地元の魅力を発信し、新たな魅力を発信し、は25日、能美市の食材祭りのにぎわい創出につなげる。を使って菓子を、同市仏大寺町で開かれるほっこり学生は、食物の栄養まつり（北陸新幹線北価値）で提供する。祭りを主催する能美の里山ファン倶楽部は、学生主に和風料理に使われていた地元食材を洋風にアレンジし菓子を考案した。「平成の名水百選」に選ばれた、祭り会場近くの湧水鶴音霊水を使用し、タルトやチーズケーキなど、祭りに出品する新メニューの開発に取り組んでいる。

祭り当日は、菓子の販売のほか、野外に特設した カフェで味わうこともでき、栄養士を目指して勉強中の学生が、食材の栄養価などについて説明する。

学生の若い視点を取り入れて祭りを盛り上げようと、能美の里山ファン倶楽部が、大学コンソーシアム石川の「地域貢献型学生プロジェクト」を通して、出店する学生を募集した。同コンソーシアムの選考の結果、スイーツ研究所が選ばれた。野村京子代表は「自分たちが作ったスイーツが地域の活性化につながればうれしい」と話した。「ほっこりまつり」は、同市和気町のこくぞう里山公園で24日、寺井高美術部がデザインした笑うもぐらをとらす魅場会やミニ音楽会が開かれるほか、25日には同市仏大寺町で、茶わん市や宮木染め体験などが催される。

以上を試作の結果、「なめこのパウンドケーキ」はぬめり部分が黒く変色し、テクスチャーも好ましくなく、パンナコッタの柚子ジュレがけは柚子の酸によりパンナコッタが分離してしまうことが分かった。

さらに、「里芋のブリュレ」は凝固しにくいことと、提供が難しいことから、この３品目は取り止めた。

試作に際しての問題点としては、食材の入手の難しいものがあったことである。特に柚子は収穫の時期が遅く、国造地区の特産品である柚子ジュースを使うことで代替した。

なお、この取り組みは、メディアにも取り上げられ、このイベントのＰＲに貢献することができた。

３．地域活動の評価

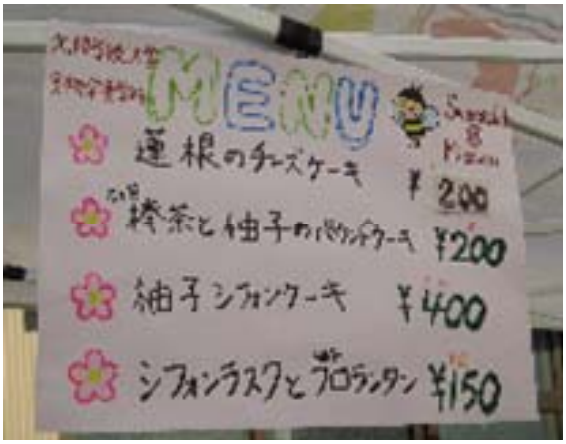
最初は、主催者と学生との年齢差や、初めての参加ということで、ぎこちない面がすくなくなかったが、打ち合わせを重ねるうちに、打ち解け合うことができた。また、運営についても主催者との連絡を密に取り合うことによって、比較的スムーズに進めることができたと思う。

今回の活動を通して、スイーツの商品化における問題点を認識することができた。また、かまど炊きごはんやおくもじ、大根煮などの盛りつけや販売を手伝うことで、日頃経験できない郷土食にふれることができたことは有益であったと考える。特に参加した学生は地域の人々との交流を通して、里山の新たな魅力を発見し、様々な学びを深めることができたことは大きな収穫であった。

一方で、地域から要請のあった体験活動には取り組むことができなかったことや、活動が主に食の関係にのみ止まってしまったことは今後の課題となった。

また、スイーツの継続的、本格的な商品化にはクラブの人員だけでは限界があり、専門業者への製造委託などが必要になることから、地域の業者との連携を模索しなければならないであろう。

いろいろ課題は残されたものの、当クラブのために活動の場を提供して下さったＭさんはじめ、地元の方々には深く感謝をしている。



４．今後，この地域活動を継続，活発化していくために必要なもの，及び課題

今後、効果的な活動を行うためには、主催者側が何を求めているかと、こちら側は何ができるかのすり合わせが重要である。また、学生が積極的に関わるためには、イベント開催以前に地域住民の方々との交流が必要であると考える。

スイーツ販売においては、衛生面や内容を充実させるために、冷蔵庫などの設備が必要となる。

一方、公共の交通機関の少ないところであり、学生の移動に費用を要することから、経費の確保が必要となる。

５．その他（学生や地域の方の感想等）

この地域自体を知らない学生も多く、当初、意欲的でなかったものも、地域の方々との交流を経験することによって、地域の良さを知り、充実した時間を過ごすことができた。

地域の方々からは、「思った以上に学生がよく働いてくれた。祭り全体も盛り上がって良かった。」という感想を頂いた。

この活動をきっかけに、今後も交流を続けさせていただければと思う。